

TENTĪ TO DAY			1
会員の広場			2
感想	吉村昭一著「ポーツマス条約」を読んで(1)	臺 一郎	2
歴史	「了解日本(日本を知る)(2)中国文化から得られる心の糧	兪彭年	4
随想	国立慕情 (17・完)	津田孚人	9
事務局			13

\*\*\*\*\*

### TENTĪ TODAY

\*\*\*\*\*

敬老の日(19日)、秋分の日(23日)とつづき、シルバー週間を迎えます。格別の行事案内もないので、関心が薄いのですが、100歳を越える高齢者が全国で9万人以上と知り、85歳の身は、いっぺんに、シルバー風が霧散しました。コロナ禍で、顔を合わせる事が少なくなりました。便りの無いのは元気な証拠と納得しながらも、やはり直接顔を合わせ、しゃべりたいものです。もうしばらくの我慢で済むと良いのですが

\*\*\*\*\*

最近ではニュースが多いせいか、朝、新聞を取りに行く楽しみが少し出てきました。ページ数が減り、さらに全面広告が増え、取りやめを考えるのですが、長年の習慣で止められません。事件、ニュースは、テレビで知り、詳しいことは新聞、雑誌で読む、ということにしています。

\*\*\*\*\*

「旧統一教会と日本」、政治家の個人的な係り、国政への影響が大変気になります。「政策が一致するところがあり支援を受けた」と国会議員は言い訳しましたが、旧統一教会の政策実現のために日本の政治家が利用された疑念が拭えなくなりました。旧統一教会は、日本の中枢へさらに浸食、日本は右傾化していく、というような悪夢はみたくありません。

\*\*\*\*\*

旧統一教会は、戦前日本が韓国へ犯した負の債務を、日本の信者から取り立てているという構図が最近見えてきました。戦時賠償問題で、日韓の対立が続いていますが、対立は表面上のことで実質的には決着がついている、と見えなくもありません。マスコミの報道、論調に注目しています。

\*\*\*\*\*

世界は、ロシアのウクライナ侵攻で資源、エネルギー、環境、領土、宇宙開発など、多事多難の不安定な新しい時代を迎えています。日本も重大な節目の時、国民全体で真剣な議論をするべき時を迎えています。国会が開かれず、審議が行われないのであれば、民意を問う選挙が必要です。

\*\*\*\*\*

### お願い

愈さんの著書、「了解日本・了解日語(日本を知る、日本語を知る)」は、日本語を学ぶ中国人向けに書かれたものです。前半の「日本を知る」は中国語、後半の「日本語を知る」は日本語と、それぞれ言語を使い分けています。日本の歴史をどのように中国人に伝えているか、愈さんが中国では著名な学者なので、興味があります。現在、前半の中国語の部分の日本語訳に挑戦しています。日本の慣用句を中国語で表示、それをまた日本語に翻訳する、というのは、難題です。

今回、日本の慣用句をそのまま使う、中国語の表記をそのまま残す、と使い分けてみました。ご意見、ご感想ぜひお寄せ下さい。

\*\*\*\*\*

## 会 員 の 広 場

\*\*\*\*\*

### 吉村昭著・「ポーツマスの旗」を読んでーその1ー 臺 一郎 (74 歳)

以下は最近読了した吉村昭著の「ポーツマスの旗」(外相・小村寿太郎)の紹介並びに感想文である。

新刊本ではない。初版が昭和 58 年の新潮文庫で、筆者が読んだのは令和 3 年 5 月の 33 刷版の本。副題に外相・小村寿太郎とある。日露戦争の終結に向けて、当時の外務大臣でポーツマス講話会議の日本側首席全権として交渉の矢面に立ち、講和を成し遂げた小村寿太郎の言動、姿勢、人物像等を描いた作品である。よって日露戦争の経緯や戦況やエピソードを詳細に紹介記述したものではなく、あくまでも講話交渉についての経緯やエピソード、全権小村寿太郎の役割や言動等の解説に焦点が当てられている。

今年 2022 年 2 月 24 日、ロシアは突如ウクライナへと武力侵攻し、両国は実質的に戦争状態となった。ウクライナ側の予想外の反撃力と米国を始めとする NATO 各国の軍事支援によって、当初 1 ヶ月で終わるとみられていた戦争は、7 ヶ月近く経った現

在もなお続いている。昔から戦争は終わり方が難しいと言われるが、ウクライナ戦争においてもこれは当てはまる。今後は終戦に向けて、外交の果たす役割と重要性が一段と高まるだろう。そんな認識から、我が国の外交史上でもまれな天才的外交官と言われた小村寿太郎によるポーツマス講話交渉での貢献や活躍を知りたくなり、この本を読んだ。

ご存知とは思いますが、最初に日露戦争について簡単に事実と経緯を整理しておきたい。日露戦争は、1904年(明治37年2月)に日本側からロシアへの宣戦布告と旅順要塞攻撃のための仁川上陸によって始まり、翌1905年(明治38年)9月に米国ポーツマスにおける講話条約の調印によって終結した。なおこの戦争は20世紀になって最初の本格的な国家間戦争であった。

近代国家への移行から僅か40年足らずの日本国と、世界屈指の軍事力を有する欧州の大国・帝政ロシア国との戦争であり、当時の日本にはロシアと長期に渡り戦争を続けられるほどの国力・軍事力はなく、ともかく早期に終戦に持ち込むことが不可欠の戦争であった。ちなみに、戦争の原因は朝鮮半島や満州における日露両国による権益を巡る争いである。また、日本を戦争に踏み切らせた決め手の一つは、二年前の1902年に外相小村寿太郎の尽力により成立した日英同盟であった。

当時の英国は世界第一の超大国。普通の国とは軍事同盟など結ばないと言うのが世界の常識だった。そんな超大国が、まだ国力も小さい極東の新興国日本と軍事同盟を結んだ事は、日本政府にとって自国の国際的地位をも高める大変に有りがたいことであった。背景には英国が、中国における英国の権益を守る上で日本と同盟関係を結んでおけば、中国に対して権益の拡大を目論むロシア、ドイツ、フランス等への牽制になるとの目論みや、日清戦争等を通じて日本の軍隊の強さ、規律の良さ、モラルの高さ等を大変評価していたからとされる。

さて、日露戦争による戦死者は日本側が8万8千人、ロシア側が8万1千人、負傷者は日本が15万4千人でロシアが14万6千人であり、一年半にわたる戦費は約20億円(現在価格で2兆6千億円)で、これは当時の我が国の毎年の国家歳入額4億円の5年分という巨額であった。これらの数字を見ても、日本にとっていかに無理の多い、過大な負担を強いられる戦争であったかが良くわかる。

戦争の勝敗は1905年6月までなら、陸軍、海軍共に殆どの戦闘で日本側が勝ち、その段階で講話交渉がなされて終戦となったために、歴史的には日本側の勝利で終わった戦争とされている。けれども、もし講和交渉が決裂して1905年9月以降も満州で

の戦闘が続いたならば、シベリア鉄道の完成により兵員や物資の補充が余裕で可能だったロシア陸軍の攻勢によって、満州での戦況は、国力の限界からそれ以上の兵站が最早困難となっていた日本側が押し戻され、少なくとも陸の戦いに関しては日本が負けとなった可能性が高い。

さて肝心のポーツマス講話条約のことだが、講話交渉は、ロシアのバルチック艦隊が日本の連合艦隊に完敗したタイミングをとらえて、日本側が以前から講和の可能性を相談していた米国大統領セオドア・ルーズベルトにロシアとの講話交渉の仲介を正式に依頼し、それを受けてルーズベルトがロシア側に講話交渉の受諾を働きかけたことから始まった。(以下は次号に続く)

\*\*\*\*\*

中国人・一般向けに書かれた俞彭年著の「了解日本」「了解日語」「日本を知る」「日本語を知る」を、著者の了解を得て、日本語訳しました。俞さんの経歴は多彩、元上海外国語学院教授、現上海市人民对外友好協会副会長、長崎シーボルト大学名誉教授、他多数の役職あり。

「了解日本」「日本を知る」

俞彭年(85歳)

訳)八王子にほんご会・有志  
天地シニアネットワーク:監修

## 第1章 中国文化から得られる心の糧

日本の戦国時代(1467-1576)、甲斐国(現在の山梨県)の領主であった武田信玄は名将として知られ、その軍旗には中国の兵法書である孫子の「軍議」から取った「風林火山」の文字が描かれていた。

風のように速く、森のように素早く、火のように攻撃的で、山のように不動で、雲のように分かりにくく、雷鳴のようにダイナミックであることである。日本人は古来より中国文化に触れ、そこから多くの精神的な糧を得て人生を送る上での格言、箴言、座右銘、寓言として活用してきた。

これらの精神的な滋養は、中国人と日本人の精神的な滋養の橋渡しをするものである。本文は、日本人がどのような滋養を吸収してきたかを大まかに整理し、日本人と日本人の心の滋養の共通点と相違点について理解していただけたらと思う。

紀元 8 世紀に日本に伝来した兵法書『孫子』は、古代中国の最高の知恵を反映した

世界最古の兵法書として高く評価されており、軍事をはるかに超えてあらゆる競争分野で応用でき、人生や仕事の指針にもなっている。

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」、「敵を知らず己を知れば一勝一敗」「敵を知らず、己を知らずば、必ず負ける」、「戦わずして兵と為す」、「兵に常勢なく、水に常形なし」、人生や仕事の指針として活用できる。これらは日本人に最もなじみのある至理名言である。

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」、「兵に常勢なく、水に常形なし」等は、日本の慣用句になっている。日本人は、漢籍や漢詩の読み方として、「訓読法」を基本に「音読法」を加えた独自の方法を用いている。孫子の多くの名言は、日本語でも声に出して読むことができるし、暗唱することもできる。

江戸時代(1603～1867)になると朱熹儒学(日本では朱子学と呼ばれる)が官学となり、幕府は藩(藩は家臣団)のために儒教を教え、儒者を養成する昌平坂学問所を開設するようになった。藩の武士の子弟には儒教が教えられ、民間の儒者が私塾を開いて民間の子弟に儒教を教えたのである。これらの学問所は多くの人材を育成し、儒学は大普及し、林羅山、荻生徂徠、木下順庵、室鳩巢、山片蟠桃等を輩出した。儒者は儒医(漢方医)を兼ねていることが多く、民衆が儒教に接する機会が増えたのである。日本にも儒教寺院が建てられ、東京の湯島聖堂や佐賀県多久市の多久聖廟が有名である。

日本人は孔子を尊敬しており、論語を実践的な倫理として、簡潔明瞭であり、人生の重要な指針であると考えている。論語の名言は、津々浦々に知れ渡り、多くの人が日本語で暗記し、暗唱できる人も多い。

代表的な名言には、次のようなものがある。

子曰:「学びて時に之を習う、亦(また)説(よろこ)ばしからずや。

朋遠方より来る有り、亦楽しからずや。

人知らずして慍みず、亦君子ならずや」

子曰:吾十有五にして学に志す。

三十にして立つ。

四十にして惑はず。

五十にして天命を知る。

六十にして耳順(したが)ふ。

七十にして心の欲する所に従へども、矩(のり)を踰(こ)えず」

子曰:義を見てせざるは勇なきなり

子曰:剛毅朴訥は仁に近し

子曰：これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず

子曰：老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん。

子曰：知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。

子貢問ひて曰はく：一言にして以つて終身之を行ふべき者有りや。

子曰：其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。

子曰：巧言令色鮮し仁

子曰：後生畏るべし、焉（いづく）んぞ来者の今に如（し）かざるを知らんや。四十五にして聞こゆることなきは、これ亦畏るるに足らざるのみなり。

子曰：学びて思わざれば則ち罔し（くらし）、思いて学ばざれば則ち殆し。

子曰：朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり。

子曰：志士仁人は、生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り。

子曰：知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず

子曰：未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らん

子曰：過ちて改めざるを、これ過ちという

子曰：故きを温ねて新しきを知らば、以って師と為るべし。

子曰：君子は人の美を成し、人の悪をなさず。小人はこれに反す。

「温故知新」、「巧言令色鮮し仁」「己の欲せざる所は人に施すことなかれ」「学びて思わざれば則ち罔し」「後生畏るべし」「義を見てせざるは勇なきなり」「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」「遠方より来る有り、亦樂しからずや」「身を殺して仁をなす」「君子は人の美を成す」「剛毅朴訥は仁に近し」「克己復礼」など、日本の語彙や慣用句となった名句は数多い。

日本人は孟子も高く評価しており、多くの名言が格言、箴言、座右の銘になっている。代表的な名言・格言は以下の通りである

- ・千万人といえども吾往かん
- ・富貴も[其の心を]淫す能わず、貧賤も[其の節を]移うる能わず、威武も[其の志を]挫く能わざる、此れをこれ大丈夫と謂う
- ・天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず
- ・天に従うものは栄え、天に逆らうものは滅ぶ
- ・我善く吾が浩然の気を養う
- ・従う者は、都に帰るようなものである
- ・責むるは朋友の道なり
- ・大人とは、其の赤子の心を失わざる者なり

中国には「孔孟の道」という言葉があり、日本には「孔子・孟子の教え」という言葉があるが、実は同じことなのである。また、日本人は老子を知恵の宝庫として尊敬している。核力の中間子理論を研究し、ノーベル賞を受賞した日本の理論物理学者、湯川秀樹は、老子の「万物は陰を持ちながら陽を持つ、その衝動は調和を生む」という言葉からヒントを得たという言い伝えがある。など、老子の名言は古くから格言、箴言、座右の銘となっているものが多い。

- ・上善は水のごとし
- ・道は自然に法る
- ・天網恢恢疏にして失わず。
- ・人と争わず、故に尤(とがめ)無し
- ・徳を以て怨みに報う
- ・災い転じて福となす。祝福は災いの元である。
- ・百尺の高さ、一歩から始まる。

・私が何もしなければ民は自然に変化し、私が静かにしていれば民は自然と正しくなる。つまり私が何もしなければ民は豊かになり、私が欲するか欲しないかで民は自然に誠実になる。

日本人はまた、礼記、書経、荘子、漢書、後漢書、史記、淮南子、韓非子、呂氏春秋記、後漢書、紫芝通鑑、十八史略、菜根譚などの中国の諸古典や中国の古い詩(日本では「漢詩」と呼ばれる)から滋養を得た。“日本人は中国の名言・名台詞に親しんでいる。などなど、日本人には有名な名言や詩、寓話がたくさんある。

“庖丁解牛”(《庄子》)

“庄周梦为蝴蝶”(《庄子》)

“真人之息以踵，众人之息以喉”(《庄子》)

“有備無憂”(《書経》)

“風蕭蕭兮易水寒・壯士一去兮不復還。(荆轲《易水歌》)

“嗟乎，燕雀安知鸿鹄之志哉”(《史记》)

“洪門の宴”(日本では「洪門の会」として知られている。)(《史記》)

“四面楚歌”(《史記》)

“人間万事塞翁馬”(《淮南子》)

“柔能制刚”（《後漢書》）

“力拔山兮气盖世，时不利兮骓不逝。骓不逝兮可奈何，虞兮虞兮奈若何！”（项羽《垓下歌》）

“古人無復洛城東，今人还对落花風。年年歲歲花相似，歲歲年年人不同。”（劉希夷《代悲白頭翁》）

“渭城朝雨浥輕尘，客舍青青柳色新。勸君更尽一杯酒，西出阳关无故人。”（王维《送元二使安西》）

“床前看月光，疑是地上霜。举頭望山月，低頭思故鄉。”（李白《静夜思》）

“国破山河在，城春草木深。感時花溅泪，恨別鳥惊心。烽火連三月，家書抵万金。白頭搔更短，渾欲不勝簪。”（杜甫《春望》）

“春眠不覺曉，处处闻啼鳥。夜来風雨声，花落知多少。”（孟浩然《春晓》）

“春宵一刻值千金，花有清香月有阴。歌管楼台声寂寂，秋千院落夜沉沉。”（蘇軾《春夜》）

“在天愿做比翼鳥，在地愿為連理枝。天長地久有時尽，此恨绵绵無尽期”（白居易《長恨歌》）

“人生無根蒂，飄如陌上塵。分散逐風转，此已非常身。落地為兄弟，何必骨肉亲！得欢当作樂，斗酒聚比隣。盛年不重来，一日難再晨。及时当勉勵，歲月不待人。”（陶淵明《雜詩十二首之一》）

“月落鳥啼霜满天，江楓漁火对愁眠。姑蘇城外寒山寺，半夜鐘声到客船。”（張繼《楓橋夜泊》）

“白发三千丈，緣愁似个長。不知明鏡里，何处得秋霜？”（李白《秋浦歌之十五》）

“先天下之憂而憂，後天下之樂而樂。”（范仲淹《岳陽樓記》）

“渡水復渡水，看花还看花。春風江上路，不覺到君家。”（高启《尋胡隱君》）

“静中静非真静，動处静得来，才是性天之真境；樂处樂非真樂，苦中樂得来，才是見心体之真机。”（洪自誠《菜根譚》）

“少年易老学難成，一寸光陽不可輕，未覺池塘春草夢，階前梧葉已秋声。”（朱熹《偶成》）

“士別三日，即更刮目相待”（《十八史略》）

1868年にできた明治政府は「脱亜入欧」というスローガンを掲げた。脱亜入欧とは、アジアを離れること、つまり中華文明の輪から離れ、中華文明を吸収することを学ばなくなること、ヨーロッパに入ること、つまりヨーロッパの輪に入り、西洋文明を吸収することを学ぶことである。それは、日本が欧米列強の侵略によって中国が犠牲になり、抵抗できない中国文明の衰退を目の当たりにしたからである。

明治維新から 100 年、西洋に学び、西洋に追いつくことを目標に先進国になってきた。中国文化の役割や影響力は弱まったが、日本文化に長く根付いていた中国文化は消滅せず、今も心の糧として重要な役割を担っている。

現在の日本文化は、「日本文化」、それを学習・吸収した「中国文化」、学習・吸収した「西洋文化」の 3 つの部分から構成されていると言える。未来は明らかで、中国の夢は実現し、中華民族は復活し、日本は中国の勃興に更に注目し、中国の文化熱は次第に高まっていくだろう。

（つづく）

\*\*\*\*\*

国立慕情(17)

津田孚人(85歳)

大学のバスケットのリーグ戦が始まった。第1戦の相手は帝京平成大学、駒沢オリンピック公園内のコートで9月7日(水)に行われた。試合は、夕方 4 時から。電車がラッシュ時と重なるので本来なら止めるところだが、最近は、「何事もこれが最後」と思うことにしており、さらに昨年度のリーグ戦にあたって「コロナ禍でどのチームも練習不足、練習をきっちり続けていけば昇格のチャンスが出てくる」と学生にハッパをかけたのが効いた(?)のか、小生が監督していた時以来の3部昇格を達成、楽しみが増えている。

他の競技では、3部は大した位置ではないかもしれぬが、関東大学バスケット連盟

は、加盟校97の大所帯、1部14校、2部12校、3部12校、以下、4部、5部となり、それなりの価値がある。順位的には、1～3部、38校の38番目と威張れないが、38校の中で、国公立の大学で上位にいるのは筑波大だけ、というところに大変な意味がある。

前回の3部時代、毎試合接戦をした江戸川大学の北原監督(元オリンピック選手)から、「一橋は、推薦入学制度は無いのですよね・・・」と、強さを不思議がられたことがあった。今回、東京学芸大、横浜国大、埼玉大、千葉大など4部になった大学は、一橋とは学生数が違う上に、教育系の学部があって体育科があり、体育専門の学生がいる。したがって高校時代の有力選手が入りやすい。総合大学といっても1学年約1200名、文系専門では、大きなハンディキャップがある。

今年度は、それを乗り越えたところに大きな喜びもある。また同様の環境にある東大、東工大、東京外語大などのライバル校より上位にいるのも嬉しく、楽しい。

3部になると公式プログラムの扱いも違ってくる。選手個人の経歴と写真が載るので、選手にとっては良き思い出、貴重な記録になる。1冊、1200円と有料。しかし、一方で3部になると地域性がはずれるので、試合会場が遠くなり、選手も大変、応援も大変となる。前回の3部の時、メンバー校の関東学院のコートは小田原、新幹線で行った。今年度、関東学院は2部で対戦しない。したがって小田原はない。

但し、従来3部ではA・Bと2ブロックに分けて一次リーグを行っていたのを12校総当たりの一次リーグに変更になった。さらに、その後、上位グループ、下位グループに分かれて順位戦を行うので、試合数が、倍に増えている。選手も応援団も長期戦となって大変。試合は、毎週土、日と祝日に行われるので選手層が薄いチームは厳しくなる。スタートしたリーグ戦、9月7日の帝京平成大学戦、次の横浜桐蔭大学戦と連敗したが、3戦目の文教大学戦は僅差で勝った。今後は上位校とあたるので勝利を得るのは難しそう。その中で、公式戦で戦うのは6～70年ぶりという慶応戦があり、楽しみは大きい。

振り返ると、関東大学バスケットボール連盟は大正13年に一橋、早稲田、立教の3大学で結成されてリーグ戦スタート、一橋は、昭和3年、昭和4年と1位、となっている。戦前は、名門で強豪校だったが、戦後、参加校が増えると順位が落ち、一部でリーグ戦を迎えることは一度もない。昭和57年(1982年)に関東大学バスケット連盟が結成された時には、4部以下が定位置となった。新連盟が発足して今年で40年、3部になったのは今年度を入れて2度だけ、名門のプライドは消えてしまった。

3部に初めて昇格したときには、戦前、戦後に苦勞をしてバスケットをつづけ、卒業後も社業の合間をみて、試合に、練習にと応援に駆け付けてくれた多くの先輩方が、「祝賀会」を開いてくれた。大半の方が故人となられているが、今回もしかしたら黄泉

の国から駆けつけ、陰ながら応援してくれるのではと、あらぬ期待をもったりしている。

個人的には、就職して東京勤務が多かったので、クラブ運営にできるだけ参加した。主として会計を担当し、ときに学生チームの指導者が不在になるときには、監督、コーチを引き受けたりした。広島、神戸と転勤したときは離れたが、1998年に定年退職してから、また首を突っ込むようになった。

このころ、リーグ編成が8部まであり、学生チームは7部にあって弱体化、さらに大先輩が大勢応援に行っても、若手OBの監督、コーチは挨拶もしないほどに、分裂。その結果、OBへの会費・寄付の依頼が減って財政危機に陥り、不足分は、理事長が一時的に立て替えていた。

新会長となった加島義一先輩(東京海上火災・専務)は、危機的な状況にあるクラブ体制を立て直そうという指示をだし、理事会が積極的に協力することにした。

まず学生チームの立て直し。伝統的に監督、コーチは内部から選んでいた。余談だが、1964年東京オリンピックのとき、日本チームのヘッドコーチとなった吉井さんは、一橋の体育の教授(あるいは助教授?)だった。オリンピック終了後、一橋のコーチをしないのですかと聞かれたとき、一橋はOB会が強いのでと辞退された、という話を聞かされた。吉井さんは、東京教育大の出身、もしコーチを引き受けておられたら、一橋は大きく変わっていたと思われる。

本題に戻って、OBの片手間の監督、コーチは、仕事を抱えているので試合だけに来るという状態だった。そこで、定年を迎えた先輩連を積極的に活用しようというのが会長の意向で、33年卒で、東京海上でもプレーをしていた森陽司先輩に加島会長が監督就任を依頼した。コーチには三輪昭一郎(37年卒・三菱商事)、吉岡直(昭和38年卒・三菱重工)と学生時代キャプテンを務めた二人がつき新指導陣としてスタートした。一方、理事会も、40年卒の小宮山理事長から、遡って昭和35年卒の新井孝尚先輩にお願いすることになった。

森監督は、指導法を大きく変えた。それまでは、仕事の合間に指導というスタイルが長年続き、練習は殆ど見なかったが、森さんは、土、日、は勿論、平日の練習でもコーチ陣の誰かが参加するようにした。リーグ戦の編成も変わって、1~3部、4部、5部となり、4部の中位校で戦えるようになった。また、新井理事長は、関東学生バスケットボール協会の役員となり、財務担当を長く努められた。

2シーズンほどで4部の中位校の地位は固まったが、さらに上位への道が見えない。加島会長から、「指導陣に問題がありそう、一新しよう」という問題提起があり、新スタッフを探すことになった。しかし、森さんのように、始終練習に参加する監督は無理、と引き受け手がない。大学の教員をしていた昭和59年卒の某君が引き受けても良い

ということになったが「OBは口を出さない、と約束して欲しい」という要望があり、うるさい先輩が多いので、それは「無理」と流れてしまった。

時間もなくなり、森先輩の逆鱗に触れたがやむなく1年間、小生が引き受けることになった。森さんを納得させるには、森さん以上に、練習、試合に参加することなので、国立の練習に、試合場にとせつせと通った。

その年度のリーグ戦で成績が少し上がったこともあるが、後継者が現れないので、その後も監督を続けることになった。経験的にも、性格的にも、怒鳴ったり、押し付けたりするのは、苦手で、試合も練習も、ほとんど学生任せだった。応援にきた大先輩から、「試合中、お前は水ばかり飲んで、何も指示しない。どうなっているんだ」と叱責されたこともあった。

学生へは、「対外試合は、オール一橋で戦うので、選手は部員だけでない。同好会でも、その他の学生でも、バスケットの好きな人は練習に参加してよいし、その中からベストのチームを作って試合に臨む」というのを基本方針にした。

その結果、2年生のときに同好会から2名入部。時間を経てだが、スタートメンバーになり、一人はキャプテンになった。また、3年の終わりに入部した選手は、石川県の名門高校出身で、高校代表として国民大会に出ていた。入学して3年間は授業に打ち込み、4年時は、卒業後の友達作りに励む、との予定でと言って入部してきたが、準レギュラーとなってリーグ戦で活躍した。彼の基本に忠実なプレーは、他校の監督も注目していた。また、半年ほど練習に参加した海外留学生もいた。日系人だったが、身長が高く練習台となって、チームに貢献してくれた。公式戦には出られないが練習試合は出場可能だったので、ときどき試合に起用した。

日本人の悪い癖は、組織の保持と集団行動に拘り、常時参加できないメンバーは、外される。しかし、練習は、全員集まらなくては出来ないものではなく、個人練習も必要だ。個人のレベルアップは組織のプラスになる。日本人は集団で行う練習時間が長すぎる。授業もあり、バイトもある。個人にとって必要、不可欠なものを先ず優先、空いたときに集団練習、個人練習をするスタイルが、学生スポーツにとって最も望ましい、というのが長年、学生スポーツ界に関係して来た筆者の結論。

監督を止めてからクラブの会長を数年前まで引き受けていた。本来なら学生と一緒に場にいたかったのだが、高校時代から知り、いつも一緒に行動していた先輩から、本当はやりたくないんだが、止む無く会長になる。よって監督を止めて副会長になれと。突如言われた。シーズン途中なので今、監督を止めると、5部に落ちてしまうかもしれない、と反論したが強引に押し切られ、シーズン途中で監督を降りた。危惧したとおり、チームは翌年5部に転落、後任の監督に大迷惑をかけることになった。

前任の会長とは疎遠になったが、しばらくして急死。前々会長から、会長を引き受けろと言われて、止む無く引き受けた。幸い、後輩理事長がしっかりしてクラブ運営にあっていたので殆ど任せきりにしてコロナ禍前に会長職を降りた。

高校生のときから現在まで、一橋大学バスケットクラブとの関わりが長くつづいたが、指導してくれた殆どの先輩は他界、クラブは、新しい時代を迎えている。伝統は過去のものとなりそうだが、現在の人たちはあまり気にしない。つなぎ役も不要になってきた。今後はたまに試合に出かけることだけを楽しみにして終わりとすることにし、国立慕情シリーズも、今回を以て終わりにすることにした。

(完)

\*\*\*\*\*

## 事務局

\*\*\*\*\*

天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：[tentisenior06@gmail.com](mailto:tentisenior06@gmail.com)

電話・FAX 03-3819-7651